

抑^{そもそもまれ}希に人身をうけ、適^{たまたま}仏法をきけり。然るに法に浅深^{せんじん}あり、人に高下ありと云へり。何なる法を修行してか速やかに仏になり候べき。願はくは其の道を聞かんと思ふ。答へて云はく、家々に尊勝あり、国々に高貴あり。皆其の君を賞^{たつと}み、其の親を崇^{あが}むといへども、豈^{あに}国王にまさるべきや。爰^{ここ}に知んぬ、大小権實は家々の争^{あらそ}ひなれども、一代聖教の中には法華独り勝れたり。是頓証菩提の指南、直至道場の車輪なり。

疑って云はく、人師は経論の心を得て釈を作る者なり。然らば則ち宗々の人師、面々各々に教門をしつらひ、釈を作り、義を立て証得菩提を志す。何ぞ虚しかるべきや。然るに法華独り勝ると候はゞ、心せばくこそ覚え候へ。答へて云はく、法華独りいみじと申すが心せばく候はゞ、釈尊程心せばき人は世に候はじ。何ぞ誤りの甚^{はなはだ}しきや。且く一經一流の釈を引いて其の迷ひをさとらせん。無量義経に云はく「種々に法を説き、種々に法を説くこと方便力を以てす。四十余年未だ真実を顕はさず」云云。此の文を聞いて大莊嚴等の八万の菩薩一同に「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず」と領解し給へり。此の文の心は、華嚴・阿含・方等・般若の四十余年の経に付いて、いかに念仏を申し、禅宗を持って仏道を願ひ、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、無上菩提を成ずる事を得じと云へり。しかのみならず、方便品には「世尊は法久しくして後^{かなら}要^{まさ}ず当に真実を説き給ふべし」ととき、又「唯一乗の法のみ有り二無く亦三無し」と説きて此の経ばかりまことなりと云ひ、又二の巻には「唯我一人のみ能く救護^{くご}を為す」と教へ、「但^{ねが}楽^たって大乘經典を受持して乃至余経の一偈をも受けざれ」と説き給へり。文の心は、たゞわれ一人してよくすくひまもる事をなす、法華経をうけたもたん事をねがひて、余経の一偈をもうけざれと見えたり。又云はく「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」云云。此の文の心は、若し人此の経を信ぜずして此の経にそむかば、則ち一切世間の仏のたねをたつものなり。その人は命をわらば無間地獄に入るべしと説き給へり。此等の文をうけて天台は「將に魔の仏と作るに非ずやの詞、正しく此の文によれり」と判じ給へり。唯人師の釈計りを憑みて、仏説によらずば何ぞ仏法と云ふ名を付すべきや。言語道断の次第なり。之に依て智証大師は「経に大小なく理に偏円なしと云って、一切人によらば仏説無用なり」と釈し給へり。天台は「若し深く所以有りて、復修多羅と合する者は、録して之を用ふ。文無く義無きは信受すべからず」と判じ給へり。又云はく「文証無きは悉く是邪謂なり」とも云へり。いかゞ心得べきや。

問うて云はく、人師の釈はさも候べし。爾前の諸経に此の経第一とも説き、諸経の王とも宣べたり。若し爾らば仏説なりとも用ゆべからず候か如何。答へて云はく、設ひ此の経第一とも諸経の王とも申し候へ、皆是権教なり。其の語によるべからず。之に依て

仏は「了義經によりて不了義經によらざれ」と説き、妙樂大師は「縦ひ經有りて諸經の王と云ふとも、已今当説最為第一と云はざれば兼但对帶其の義知んぬべし」と釈し給へり。此の釈の心は、設ひ經ありて諸經の王とは云ふとも、前に説きつる經にも後に説かんずる經にも此の經はまされりと云はずば、方便の經としれと云ふ釈なり。されば爾前の經の習ひとして、今説く經より後に又經を説くべき由を云はざるなり。唯法華經計りこそ最後の極説なるが故に、已今当の中に此の經独り勝れたりと説かれて候へ。されば釈には「唯法華に至って前教の意を説いて今教の意を顯はす」と申して、法華經にて如来の本意も、教化の儀式も定まりたりと見へたり。之に依って天台は「如来成道四十余年未だ真実を顯はさず、法華始めて真実を顯はす」と云へり。此の文の心は、如来世に出させ給ひて四十余年が間は真実の法をば顯はさず。法華經に始めて仏になる実の道を顯はし給へりと釈し給へり。

問うて云はく、已今当の中に法華經勝れたりと云ふ事はさも候べし。但し有る人師の云はく、四十余年未顯真実と云ふは法華經にて仏になる声聞の為なり。爾前の得益の菩薩の為には未顯真実と云ふべからずと云ふ義をばいかゞ心得候べきや。答へて云はく、法華經は二乗の為なり、菩薩の為にあらず、されば未顯真実と云ふ事二乗に限るべしと云ふは徳一大師の義か。此は法相宗の人なり。此の事を伝教大師破し給ふに「現在の麁食者は偽章数巻を作つて法を謗じ人を謗ず、何ぞ地獄に墮せざらんや」と破し給ひしかば、徳一大師其の語に責められて舌八つにさけてうせ給ひき。未顯真実とは二乗の為なりと云はゞ最も理を得たり。其の故は如来布教の元旨は元より二乗の為なり。一代の化儀、三周の善巧、併ら二乗を正意とし給へり。されば華嚴經には地獄の衆生は仏になるとも二乗は仏になるべからずと嫌ひ、方等には高峯に蓮の生ひざるように、二乗は仏の種をいりたりと云はれ、般若には五逆罪の者は仏になるべし、二乗は叶ふべからずと捨てらる。かゝるあさましき捨者の仏になるを以て如来の本意とし、法華經の規模とす。之に依って天台云はく「華嚴大品も之を治すること能はず。唯法華のみ有つて能く無学をして還つて善根を生じ仏道を成ずることを得せしむ。所以に妙と称す」と。又「闍提は心有り、猶作仏すべし。二乗は智を滅す、心生ずべからず。法華能く治す、復称して妙と為す」云云。此の文の心は委しく申すに及ばず。誠に知んぬ、華嚴・方等・大品等の法薬も、二乗の重病をばいやさず。又三悪道の罪人をも菩薩ぞと爾前の經にはゆるせども、二乗をばゆるさず。之に依って妙樂大師は「余趣を實に会すること諸經に或は有れども二乗は全く無し。故に菩薩に合して二乗に対し難きに従つて説く」と釈し給へり。しかのみならず「二乗の作仏は一切衆生の成仏を顯はす」と天台は判じ給へり。修羅が大海を渡らんをば是難しとやせん。嬰兒の力士を投げん、何ぞたやすしとせん。然らば則ち仏性の種ある者は仏になるべしと爾前に説けども、未だ焦種の者作仏すべしとは説かず。かゝる重病をたやすくいやすは、独り法華の良薬なり。只須く汝仏にならんと思はゞ、慢のはたほこをたをし、忿りの杖をすて、偏に一乗に歸すべし。名聞名

利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしなり。嗚呼、恥ずべし恥ずべし、恐るべし恐るべし。

問うて云はく、一を以て万を察する事なれば、あらあら法華のいはれを聞くに耳目始めて明らかなり。但し法華經をばいかやうに心得候てか、速やかに菩提の岸に到るべきや。伝へ聞く、一念三千の太虚には慧日くもる事なく、一心三觀の広池には智水にごる事なき人こそ、其の修行に堪へたる機にて候なれ。然るに南都の修学に臂をくたす事なかりしかば、瑜伽・唯識にもくらし。北嶺の学文に眼をさらさざりしかば、止觀・玄義にも迷へり。天台・法相の両宗はほとぎを蒙って壁に向かへるが如し。されば法華の機には既にもれて候にこそ、何んがし候べき。答へて云はく、利智精進にして觀法修行するのみ法華の機ぞと云ひて、無智の人を妨ぐるは当世の学者の所行なり。是還って愚癡邪見の至りなり。一切衆生皆成仏道の教なれば、上根上機は觀念觀法も然るべし。下根下機は唯信心肝要なり。されば經には「淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん」と説き給へり。いかにも信じて次の生の仏前を期すべきなり。譬へば高き岸の下に人ありて登る事あたはざらん、又岸の上に人ありて繩をおろして此の繩にとりつかば、我岸の上に引き登さんと云はんに、引く人の力を疑ひ繩の弱からん事をあやぶみて、手を納めて是をとらざらんが如し。争でか岸の上に登る事をうべき。若し其の詞に随ひて、手をのべ是をとらへば即ち登る事をうべし。「唯我一人のみ能く救護を為す」の仏の御力を疑ひ「以信得入」の法華經の教への繩をあやぶみて、「決定無有疑」の妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず。菩提の岸に登る事難かるべし。不信の者は墮在泥梨の根元なり。されば經には「疑ひを生じて信ぜざらん者は則ち当に惡道に墮つべし」と説かれたり。受けがたき人身をうけ、値ひがたき仏法にあひて争でか虚しくて候べきぞ。同じく信を取るならば、又大小権実のある中に、諸仏出世の本意、衆生成仏の直道の一乘をこそ信ずべけれ。持つ処の御經の諸經に勝れてましませば、能く持つ人も亦諸人にまされり。爰を以て經に云はく「能く是の經を持つ者は一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」と説き給へり。大聖の金言疑ひなし。然るに人此の理をしらず見ずして、名聞狐疑偏執を致せるは墮獄の基なり。只願はくは經を持ち、名を十方の仏陀の願海に流し、譽れを三世の菩薩の慈天に施すべし。然れば法華經を持ち奉る人は、天竜八部諸大菩薩を以て我れ眷屬とする者なり。しかのみならず、因身の肉団に果満の仏眼を備へ、有為の凡膚に無為の聖衣を著ぬれば、三途に恐れなく八難に憚りなし。七方便の山の頂に登りて九法界の雲を払ひ、無垢地の園に花開け、法性の空に月明らかならん。「是の人仏道に於て、決定して疑ひ有ること無けん」の文憑みあり。「唯我一人のみ能く救護を為す」の説疑ひなし。一念信解の功德は五波羅蜜の行に越へ、五十展轉の隨喜は八十年の布施に勝れたり。頓証菩提の教は遙かに群典に秀で、顯本遠寿の説は永く諸乘に絶えたり。爰を以て八歳の竜女は大海より来たりて經力を刹那に示し、本化の上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顯はす。

言語道断の経王、心行所滅の妙法なり。

然るに此の理を^{ことわり}を^忍を^諸を^等を^余を^經に^{ひと}を^しを^むるは、謗法の至り、大罪の至極なり。譬へを取るに物なし。仏の神変にても何ぞ是を説き尽くさん。菩薩の智力にても争でか是を量るべき。されば譬喩品に云はく「若し其の罪を説かば、劫を窮むとも尽きじ」と云へり。文の心は法華經を一度もそむける人の罪をば、劫を窮むとも説き尽くし難しと見へたり。然る間、三世の諸仏の化導にもまれ、恒沙の如来の法門にも捨てられ、冥きより冥きに入りて阿鼻大城の苦患争でか免れん。誰か心あらん人長劫の悲しみを恐れざらんや。愛を以て經に云はく「經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して而も結恨を懐かん。其の人命終して阿鼻獄に入らん」云云。文の心は、法華經をよみたもたん者を見て、かるしめ、いやしみ、にくみ、そねみ、うらみをむすばん。其の人は命をはりて阿鼻大城に入らんと云へり。大聖の金言誰か是を恐れざらんや。「正直捨方便」の明文、豈是を疑ふべきや。然るに人皆經文に背き、世悉く法理に迷へり。汝何ぞ悪友の教へに隨はんや。されば「邪師の法を信じ受くる者を名づけて毒を飲む者なり」と天台は釈し給へり。汝能く是を慎むべし、是を慎むべし。

倩世間を見るに法をば貴しと申せども、其の人をば万人是を惡む。汝能く能く法の源に迷へり。何にと云ふに、一切の草木は地より出生せり。是を以て思ふに、一切の仏法も又人によりて弘まるべし。之に依って天台は「仏世すら猶人を以て法を顯はず。末代はいつくんぞ法は貴けれども人は賤しと云はんや」とこそ釈して御坐し候へ。されば持たるゝ法だに第一ならば、持つ人随って第一なるべし。然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり。其の子を賤しむるは即ち其の親を賤しむなり。愛に知んぬ、当世の人は詞と心と総てあはず、孝經を以て其の親を打つが如し。豈冥の照覽恥づかしからざらんや。地獄の苦しみ恐るべし恐るべし。慎むべし慎むべし。上根に望めても卑下すべからず。下根を捨てざるは本懐なり。下根に望めても憍慢ならざれ。上根ももるゝ事あり、心をいたさざるが故に。

凡そ其の里ゆかしけれども道たえ縁なきには、通ふ心もをろそかに、其の人恋しけれども憑めず契らぬには、待つ思ひもなをざりなるやうに、彼の月・雲客に勝れたる靈山浄土の行きやすきにも未だゆかず。「我即是父」の柔軟の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず。是誠に袂をくたし、胸をこがす歎きならざらんや。暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも心をもよほす思ひなり。事にふれ、をりに付けても後世を心にかへ、花の春、雪の朝も是を思ひ、風さはぎ、村雲まよふ夕にも忘るゝ隙なかれ。出る息は入る息をまたず。何なる時節ありてか、毎自作是念の悲願を忘れ、何なる月日ありてか、無一不成仏の御經を持たざらん。昨日が今日になり、去年の今年となる事も、是期する処の余命にはあらざるをや。総て過ぎにし方をかぞへて、年の積るをば知るといへども、今行末にをいて、一日片時も誰か命の数に入るべき。臨終已に今にありとは知りながら、我慢偏執名聞利養に著して妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下に

かひなし。さこそは皆成仏道の御法とは云ひながら、此の人争でか仏道にものうからざるべき。色なき人の袖にはそゞろに月のやどる事かは。又命已に一念にすぎざれば、仏は一念随喜の功德と説き給へり。若し是二念三念期すと云はゞ、平等大慧の本誓、頓教一乘皆成仏の法とは云はるべからず。流布の時は末世法滅に及び、機は五逆謗法をも納めたり。故に頓証菩提の心におきてられて、狐疑執着の邪見に身を任する事なかれ。生涯幾くならず。思へば一夜の仮の宿を忘れて幾くの名利をか得ん。又得たりとも是夢の中の栄へ、珍しからぬ楽しみなり。只先世の業因に任せて嘗むべし。世間の無常をさとらん事は、眼に遮り耳にみてり。雲とやなり、雨とやなりけん、昔の人は只名をのみきく。露とや消へ、煙とや登りけん、今の友も又みえず。我いつまでか三笠の雲と思ふべき。春の花の風に随ひ、秋の紅葉の時雨に染むる。是皆ながらへぬ世の中のためしなれば、法華経には「世は皆牢固ならざること、水沫泡焰の如し」とすゝめたり。「以何令衆生得入無上道」の御心のそこ、順縁逆縁の御ことのは、已に本懐なれば暫くも持つ者も又本意にかなぬ。又本意に叶はゞ仏の恩を報ずるなり。悲母深重の経文心安ければ、唯我一人の御苦しみもかつがつやすみ給ふらん。釈迦一仏の悦び給ふのみならず、諸仏出世の本懐なれば、十方三世の諸仏も悦び給ふべし。「我即ち歡喜す、諸仏も亦然なり」と説かれたれば、仏悦び給ふのみならず、神も即ち随喜し給ふなるべし。伝教大師是を講じ給ひしかば、八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を読み給ひしかば、松尾の大明神は寒風をふせがせ給ふ。

されば「七難即滅七福即生」と祈らんにも此の御経第一なり。現世安穩と見えたればなり。他国侵逼難・自界叛逆の難の御祈禱にも、此の妙典に過ぎたるはなし。「百由旬の内に諸の衰患無からしむべし」と説かれたればなり。然るに当世の御祈禱はさかさまなり。先代流布の権教なり。末代流布の最上眞実の秘法にあらざるなり。譬へば去年の暦を用ゐ、鳥を鵲につかはんが如し。是偏に権経の邪師を貴みて、未だ実教の明師に値はせ給はざる故なり。惜しいかな、文武の平和があら玉、何くにか納めけん。嬉しいかな、釈尊出世の髻の中の明珠、今度我が身に得たる事よ。十方諸仏の証誠としてゐるがせならず。さこそは「一切世間には怨多く信じ難し」と知りながら、争でか一分の疑心を残して、決定無有疑の仏にならざらんや。過去遠々の苦しみは、徒にのみこそうけこしか。などか暫く不変常住の妙因をうへざらん。未来永々の楽しみはかつがつ心を養ふとも、しみてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず。「三界は安きこと無し、猶火宅の如し」とは如来の教へ「所以に諸法は幻の如く化の如し」とは菩薩の詞なり。寂光の都ならずば、何くも皆苦なるべし。本覚の栖を離れて何事か楽しみなるべき。願はくは「現世安穩後生善処」の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞後生の弄引なるべけれ。須く心を一にして南無妙法蓮華経と我も唱へ、他をも勧めんのみこそ、今生人界の思出なるべき。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

日蓮花押